

代々木病院の理念

ヒューマニズムにもとづく医療・介護の実践

くらしと健康

No. 653 2022年 3月号 1部60円 友の会会員は会費に含まれています 発行 東京勤労者医療会代々木病院 院長 河邊 博正 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-30-7 TEL 03(3404)7661 http://www.tokyo-kinikai.com/yoyogi

患者さんの背景を考慮し、安心して対応できるように

代々木病院精神科リエゾンチームの活動

代々木病院回復期リハビリ病棟(以下、回復期病棟)では、週1回「精神科リエゾンチーム」のカンファランスを行っています。精神科リエゾンチームは、病棟の担当医師から寄せられる精神面での問題を抱える患者さんの対応に関する相談、支援を行っています。今号では回復期病棟での精神科リエゾンチームの活動についてご紹介いたします。

精神科リエゾンチームとは?

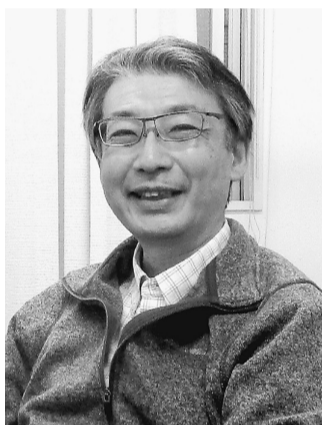
「リエゾン」はフランス語で「連携・橋渡し・つなぐ」を意味する言葉です。精神科リエゾンチームは、身体疾患で入院中の患者さんが何らかの精神面の問題を抱えた場合に、精神医療と身体医療をつなぎ、病棟の担当医師やスタッフと「連携」しながら支援を行います。

回復期リハビリ病棟とせん妄の症状と原因

回復期病棟は、脳血管障害など生活上の困難が生じた患者さんに、在宅での生活や社会復帰を目的



小谷博史医師



山田健志医師

の患者さんに対して、以前はスタッフがその対応に苦慮していましたが、精神科リエゾンチームの相談、支援を受けるようになってから、安心して患者さんに向き合えるようになった。

「調子はいかがですか?」「夜は眠れていますか?」「困っていることとありますか?」「困っていることとありますか?」など

精神科リエゾンチームカンファランス

精神科リエゾンチームのカンファランスは週1回定期的に行われ、病棟担当医、病棟スタッフ、薬剤師、精神科医師が参加しています。病棟担当



精神科リエゾンチームによるラウンド(回診)の様子。精神科医師が患者さんの声に直接耳を傾けます



病棟担当医、精神科医師、薬剤師、病棟スタッフで、週1回行われる精神科リエゾンチームカンファランス

「調子はいかがですか?」「夜は眠れていますか?」「困っていることとありますか?」など問いかけます。患者さん

「調子はいかがですか?」「夜は眠れていますか?」「困っていることとありますか?」など問いかけます。患者さん

「調子はいかがですか?」「夜は眠れていますか?」「困っていることとありますか?」など問いかけます。患者さん

回復期病棟医長の小谷博史医師は、精神科リエゾンチームの意義について、「せん妄のリスクには70歳以上の高齢者、睡眠薬の内服、脳梗塞などの脳血管障害の既往など

回復期病棟医長の小谷博史医師は、精神科リエゾンチームの意義について、「せん妄のリスクには70歳以上の高齢者、睡眠薬の内服、脳梗塞などの脳血管障害の既往など

回復期病棟医長の小谷博史医師は、精神科リエゾンチームの意義について、「せん妄のリスクには70歳以上の高齢者、睡眠薬の内服、脳梗塞などの脳血管障害の既往など

千駄の萱

国家は何のためにあるのか。国家は必要なのか。そんなことを考えさせてくれる本に出会った。

松村圭一郎著『くらのアナキズム』だ。『アナキズム』と聞くと、暴力的に無政府状態を作り出し暴れ回るイメージがつきまとうが、そうではない。鶴見俊輔はアナキズムをこんなふうに定義した。「権力による強制なしに人間がたがいに助けあって生きてゆくことを理想とする思想」。本書には、息苦しい管理社会から抜け出すためのヒントがたくさん詰まっている。▼松村氏は文化人類学者としての調査や研究から、多数決は民主主義ではないと考えるようになる。多数決は敗者を生み、少数意見は無視されるだけだ。少数派からも不満が出ずに、ゆるやかに賛同できるような妥協点を見つげるために議論することを厭わない社会を作るべきだと▼あらゆる場面において、民主的であるとはどういうことか考えさせられるし、日本が民主主義国家ではないことを改めて痛感させられる。大げさではない穏やかな語り口も、未来の生活に希望を持つことができて魅力的だ。興味のある方はぜひ。(け)